

幼児教育史学会会報 第18号

目次

第10回大会開催案内

会員研究情報：

『戦後幼児教育・保育実践記録集』の編集に携わって・・・福元真由美
幼児教育史学会での学び・・・・・・・・・・・・・・・・・・近藤幹生

理事会より

寄贈図書

事務局からのお知らせ

【第10回大会開催案内】

第10回大会は2014年12月6日(土)にお茶の水女子大学で開催します。大会の前後にも企画を予定しています。現時点では、まだ詳細についてはきまっておりませんが、学会ホームページで適宜お知らせいたします。

皆様のご参加を心よりお待ちしております。

【開催要項】

1. 期日：2014年12月6日(土)

2. 会場：お茶の水女子大学

3. 日程：

9:00～ 受付

9:30～13:00 研究発表

14:00～16:30 シンポジウム

16:45～17:30 総会

18:00～20:00 懇親会

4. シンポジウム

テーマ：子どもと戦争

司会：小玉亮子(お茶の水女子大学)

提案者：米田俊彦(お茶の水女子大学)、寺岡聖豪(福岡教育大学)

指定討論者：湯川嘉津美(上智大学)

【趣旨説明】

今年でちょうど100年目というと、日本では、何が？と聞かれることが多いが、今年、

ヨーロッパでは、あちこちで100年目の催しが盛んに行われている。100年前の1914年は、のちに第一次世界大戦と呼ばれることになる人類史上はじめての世界中を巻き込んだ戦争が始まった年である。この1914年に始まった第一次世界大戦は一旦、終結するものの、それはさらに第二次世界大戦を引き起こすこととなり、20世紀は戦争の世紀と呼ばれることとなる。1914年は世界を巻き込んだ戦争の世紀の始まりを告げる年であるともいえる。

1914年当時、植民地からの収奪の上に繁栄を誇っていたヨーロッパで、人々の多くは何事もない毎日を、ささやかに暮らしていたのかもしれない。そして、その日常があつという間に戦乱の中に突入することなど予想できた人はそう多くはなかったにちがいない。戦争は街の有り様を一変させ、暮らしの変貌を余儀なくさせる。子どもたちの生活も同様である。混乱の時代のなかで、子どもはどのように生まれ、生活し、育てられてきたのだろうか。さまざまな資料のなかで、幼い子どもたちはどのように生きたのか。

それを伝える資料は少なくはないが、その一つに大戦を生きたケーテ・コルビッツの手によるドイツの子どもたちの姿がある。そこに描かれた子どもたちについて、近代的孩子観に基づく、無垢で、純真で、可憐な子どもたちと言った言葉で語るとは難しい。「ドイツの子どもたちは飢えている」「種を粉にひいてはならない」といった彼女の作品の中の子どもたちは、いわゆる近代的孩子観の認識それ自体に迫るものといえるのではないか。

2014年の現在、第一次世界大戦勃発から100年もたつというのに、やはり戦争や紛争が絶えない時代が続いている。私たちの日常があるときから驚くような変化のただ中に突入してしまうことなどない、という保障はどこにもないのだ。

さて、今回の戦争と子どもというタイトルは、その背後に、戦争と幼児教育というテーマを考えるための手始めとしたい、というところから考案された。この戦争と幼児教育というテーマのなかに、さしあたり、以下の3つの論点を考えている。

1つ目は、世界大戦の時代に、幼児教育において共時的にどのような変化がもたらされたのか、という論点である。第一次世界大戦は世界中で同時に戦争が行われているという状況をうみだしたが、これは、逆説的に世界が一つとなったことも意味している。世界は多様なネットワークでつながり、同時多発的にさまざまな事態が生じることが可能となった。教育史上のエポックの一つである新教育と新教育運動が「インターナショナル」な広がりを見せたのは、各地の動向が瞬時に世界に伝わると同時に、それを受け入れる素地が各地に同時に準備されていたからではないだろうか。世界大戦という形で世界が瞬時に繋がるようになった時代に、幼児教育が世界でどのように展開したのか。各地で共時的に起こった変化について、世界的な視野から考えてみることは重要ではないだろうか。

2つ目の論点としては、世界が同時に経験したといっても、戦争は、勝者と敗者という対立する立場を作り出すわけであるが、このことを幼児教育はどのようにとらえたのか、という問題である。第二次世界大戦後、日本では大規模な教育改革を行なうこととなるが、それは、戦前の教育の否定から始まるものであった。戦後日本の学校教育は、6・3・3・4制はもとより、黒塗り教科書に象徴されるようなドラスティックな変容を受けることとなったことはこれまで議論が積み重ねられてきたところである。では、幼児教育はどうだったのだろうか。制度にせよ、思想にせよ、幼児教育の世界は、

戦時中に、そして、戦後にどのような展開をみせたのか。

3つ目の論点は、幼児教育の誕生と戦争との関係である。歴史的にふりかえってみると、幼児教育はその誕生のときから戦争と無縁ではなかったのではないかと、言い過ぎであろうか。例えば、ペスタロッチのシュタンツの孤児院は、戦争と混乱のなかにある子どもたちに手を差し伸べるために運営されたものであったし、フレーベルは、フランスとの戦争に義勇兵として参加し、そして、国を支える教育をめざして、ドイツが統一されるよりも前に、ドイツという言葉を冠したドイツ一般幼稚園を設立した。戦火を目の当たりにした彼らが願ったのが、幼い子どもたちを教育する場であったことは、幼児教育が戦争ということと無縁ではなかったことを示しているのではないだろうか。これまで幼児教育に取り組もうとした思想家や実践家たちが、戦争をどのようにみていたのか、議論することは意義のあることではないだろうか。

もとより、以上のような議論をすべてすすめるには、これまでの膨大な研究の蓄積を振り返る必要であり、さらなる研究と議論が積み重ねられなければならないだろう。しかし、世界大戦勃発から100年目をむかえる2014年という年に、戦争と子どもというテーマで、幼児教育を検討することは、これからの議論を積み重ねていくうえで何らかの手がかりを得ることができるのではないかと考えている。

5. 参加費・懇親会費(前納方式は採りません。受付で支払ってください)

参加費：会員・非会員 1000円(院生は無料)

懇親会費：会員・非会員 5000円(院生は3000円)

6. 研究発表の申し込み

①申し込み方法：

後日、HPに掲載する申込書にて、電子メール、ファックス、郵送の順で選択のうえ、9月6日(土)までに下記にお送りください(消印有効)。電子メールの場合のみ、数日以内に到着確認のメールを返信します。申込書をHPで閲覧できない方は、お手数ですが、準備委員会までご請求ください。

電子メール：youjikoikushi@yahoo.co.jp(学会事務局)

ファックス：03-5978-5342(第10回大会準備委員会)

郵送：〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 小玉亮子研究室 気付
幼児教育史学会第10回大会準備委員会

Phone/Fax 03-5978-5342

②発表資格：

一般会員：申し込み時に年会費を納入済みのこと

新入会員：申し込み時までに入会手続きを終え、年会費を納入済みのこと。

③発表までの手順：

申し込みを受領したあと、準備委員会で内容を検討のうえ、発表論文集の執筆要綱を送付します。下記の「お誘い」にあるように、本大会では発表数の調整をするため、個別に連絡を差しあげることがあります。

7. 問い合わせ先：第10回大会準備委員会

【お誘い(説明)】

(1)会場についてはアクセス・マップ(<http://www.ocha.ac.jp/access/index.html>)をご覧ください。地下鉄丸の内線茗荷谷駅から会場まで徒歩で15分程度です。

なお、土日は護国寺に近い南門は閉まっておりますので、土日においでになるときには、茗荷谷から正門をとおいで下さい。

また、守衛所で身分証明書の提示を求められることもあるかもしれませんので、職場の身分証明書や学生証などをご持参ください。

(2)午前中に研究発表、午後にシンポジウムと総会、夕方に懇親会という日程はこれまでの大会と同じです。

①研究発表の申し込みについては申込書をご覧ください。

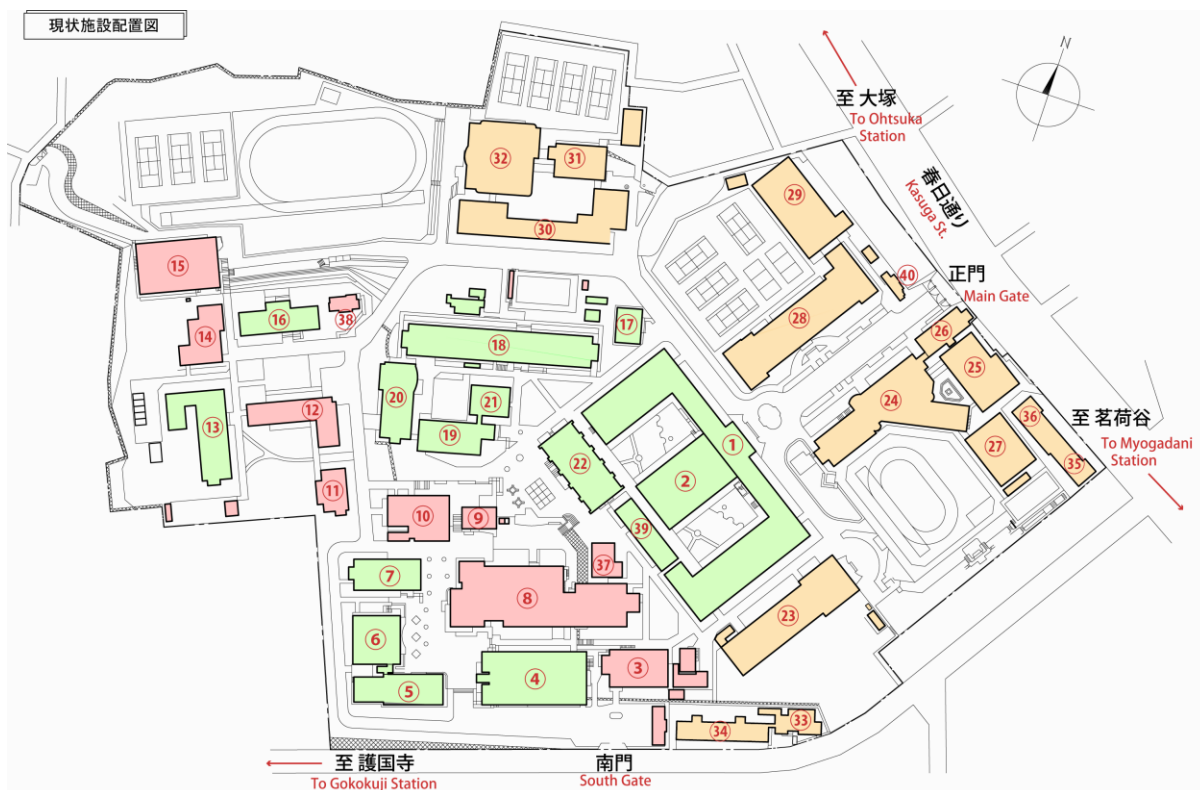
②昼食は、学内の生協食堂は空いていません。近くにコンビニがありますし、茗荷谷駅近辺に食堂はありますが、少し距離があります。できるかぎりご持参ください。また、お食事の際は休憩室をご活用いただきますようお願いいたします。

③懇親会は地下鉄駅近辺のレストランを予定しています。当日ご案内いたします。

(3)大会が早い時間から始まるため、前泊される方も多いかと思います。現在、附属幼稚園の見学や資料館の公開など交渉しているところです。また、大会翌日の午前中に「海外の幼児教育史の研究動向を愉しみながらフォローする会」も予定しております。これらについては7月末ごろまでにホームページでご連絡いたします。

(第10回大会準備委員会：小玉亮子・松島のり子・織田望美)

キャンパスマップ



【会員研究情報】

『戦後幼児教育・保育実践記録集』の編集に携わって

福元真由美(東京学芸大学)

昨年より、太田素子監修『戦後幼児教育・保育実践記録集』(日本図書センター)に編者の一人として携わらせていただいている。この実践記録集には、1950年代から1980年代までの幼稚園、保育所の実践記録が収録されている。

この時期の実践記録を読みながら、私は何度も不思議な感覚を味わうことになった。それは、日本の保育の経験してきた戦後史を保育者の語りを通して探求する歴史研究の読み方と、現代の保育の当面する課題そのものを保育者の世界の内側から解釈する読み方が、ふと入れ替わる感覚である。収録される実践記録は、歴史的に過去のものとも言えるし、私たちの生きる時代すなわち現代のものとも言える。それゆえ、過去と対話しながら保育に起こった出来事に関連を追究する知的好奇心と、現代の保育の問題をストレートに扱うことになる緊張感をもって、とても興味深く読んできた。

実践記録は、保育実践の経験を読み解くことによって、保育のアクチュアルな課題に接近できるように3つの視座を設けて編集している。それぞれの視座は、3期に分けた編集の各期のテーマとなっている。

4月に刊行された第Ⅰ期「表現する子ども—幼児の知性と人格発達へのまなざし」(全9巻)では、子どもの人格の尊重が、子どもの自主的な表現への注目と子ども理解の探求につながったことに着目した。ここには、戦前の保育問題研究会の流れをくんだ民主主義社会の担い手を育てる保育、創造美育運動や「新しい絵の会」などに学んだ絵画の実践、子どもの言葉を聴き採ることを試みた実践、遊びの展開過程を実践研究の対象にした保育の記録が収集されている。集団保育と個性尊重、感情と認識、空想と現実、表現における固有性と普遍性、発達における獲得と喪失、子どもの自由と保育者の指導などの論点を獲得して、これらの実践は多様な意味に開かれるとともに、複数の解釈の両義性に向き合ってきた。第Ⅰ期は、そこに、幼児期の知的な教育の契機がいかに見え隠れしていたのかを考える構成となっている。

今後刊行予定の第Ⅱ期「子どもの生活と仲間関係—自立を育む保育と地域社会」では、集団による保育の意味づけ方や個と集団の関係の捉え方が、「生活」をめぐる多様な実践を通してどのように展開したかの道筋をたどる。「生活づくり」の実践の系譜、乳児保育、地域連携の取り組みなどの中から、画期的な実践を取り上げて収録する。第Ⅲ期「保育のデザイン—環境構成からカリキュラムまで」では、「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」などによる公的な方向づけの一方で、現場における個性的な保育内容・方法への挑戦がいかなる軌跡を描いて実践を模索したかに迫る。保育内容の構造論、地域に根差した教材開発、活動や領域に特徴のあるカリキュラム開発、保育形態の多様性がどのような実践の創造力に結びついていったのかを探求する。

近年は、保育のさまざまな「境界」が問い直されている。例えば、幼稚園と保育所の境界、幼児期の教育と児童期の教育の境界、日本の保育と世界の保育の境界などである。新たな保育の将来像は、これらの境界を越えて描かれつつある。現代の保育の動向において、本記録集が、日本の保育実践の積み重ねてきたものを確認し、新しい提案の根拠を示す手がかりとなることを願っている。

幼児教育史学会での学び

近藤幹生(白梅学園大学)

1978年より26年間の保育園現場をへて、大学・短大の教員になり10年になるうとしている。本学会へのかかわりも10年になるが、研究面でのアプローチは遅々としている。ただ、毎年の研究発表や論文には、つねに刺激を受けている。筆者が、本学会から学んでいるのは、資料を調査し歴史研究を蓄積しようとするとき、当時の人物(子ども、保育者)が、どのように生きていたのかを具体的に見ていく努力が大切だ、といったことである。研究発表から、ある時代の園の実践を想像できるときなど、とても楽しい時間である。

明治期、長野県地域の子守学校の資料を見ている。児童が背負う幼児が泣いてしまう状況にたいして、児童の教師たちが、創意工夫をこらしながら教育実践をしている。たとえば、児童が授業に集中でき、かつ背中の幼児も、背負われたまま風車を見て楽しめるような装置を考案している。教師が夢中になって装置(教材)を作成するときの、考え方や気持ちをつかみたいのだが、資料からは容易ではない。それでも子守学校にこだわり続け見えていくと、新たな視点に気づく。背負われていた幼児は、どう考えていたのかを検討してみた。かつて背負われた幼児に出会うことができた。子守学校は、村々に広がっていたし、大正期、昭和初期でも続いていた地域があった。かつての幼児であり、背負われていた経験のある大正生まれの方から、記憶を聞くことができた。教室内で、泣いていた子が、あちこちにいたそうだ。また、背負っていた児童の側の気持ち(明治期生まれの)を背負われていた子から、聞くこともできた。なかには、背負う子がいないと孤立感をいなく(自分以外の子は、みな乳児を背負っているから寂しい)ような気持ちがあり、近所の家から子(乳幼児)を借りて、背負い学校へ通っていったという。子守学校の愉快な一断面を垣間見た思いがした。子守学校の実践に含まれる保育史、その具体像を資料で追究したいと構想を練っているのだが、研究の道のりは遙かである。

幼児教育学会は、まもなく10周年を迎える。1点、要望をさせてほしい。保育・幼児教育制度の歴史的転換がされようとしているいま、これをテーマとして企画をしていただきたい。新制度の概要の把握にとどまらず、議論の場をつくりたいのである。他学会において、同様のテーマで分科会などが開催されるが、深まりが捉えられないのは、なぜだろうか。地道に歴史研究をかさねること、実践現場の諸課題の関連性を探究できるような企画をすることを検討いただけないだろうか。

【理事会より】

『幼児教育史事典』(仮題)の取り組みについて-会員の皆様への協力をお願い

阿部真美子(聖徳大学)

昨年度の幼児教育史学会総会において提案し承認された『幼児教育史事典』(仮)について、本会報において紙面を与えていただいたので、その企画を下記に記し会員の皆様からのご意見とともに執筆のご協力をえたいと思う。

すでに宍戸会長からは大変に時間と労力がかかる作業で困難が予想される旨のご心配の声をいただいているが、本学会の今後のためにも是非取り組んでおきたいと思っている。是非ご意見をお寄せください。(2014年6月末までに mamikoa@seitoku.ac.jpへ)

○出版の趣旨

幼児教育史学会は設立後約10年になろうとし、学会開催、機関誌『幼児教育史研究』によって一定の研究成果を公表してきており、会員数も150名ほどになっている。そうした成果と人材を結集して、幼児教育史にかかわる知識と知見についてまとめることを通して、今後の幼児教育史研究の発展に寄与することを目的として企画立案した。さらに幼児教育・保育の在り様を探る上での幼児教育史研究の意義について一定の知見を示したいと考えている。発行予定は2016年3月末。

○執筆者

本学会の会員を中心とする。さらに学会の前身となった近代幼児教育史研究会会員、その他の領域の研究者にも事項説明について加わってもらうことがある。

○主な内容

I. 各国における幼児教育史

- ・思想家・運動・実践・理論・制度・政策について解説する。
- ・以下の国について会員から項目を収集し、各国責任者が精選する。

1) 日本、2) イギリス、3) ドイツ、4) フランス、5) イタリア、6) スウェーデン、7) アメリカ合衆国、8) カナダ、9) ロシア、10) 中国、11) 韓国、12) オセアニア

II. 課題研究

これまでの本学会および本年に実施される学会のシンポジウムを継承・発展させた内容にまとめる。

III. 年表の作成

【寄贈図書】

橋本伸也ほか編『保護と遺棄の子ども史』（昭和堂、2014年）。4200円＋税。

【事務局からのお知らせ】

1) 第4期役員選挙に関するお願い

同封の書類にありますように、今年は3年に1度の役員選挙の年に当たります。学会の発足から10年近くが経ち、役員についても世代間の継承と地域間の均衡が求められています。そのために昨年の総会です承を得た部分的な改正を選出方法に反映しました。どうぞよろしく願いいたします。

2) 会費納入のお願い

本学会の会計年度は10月1日から翌年の9月30日までです。今回、振込用紙は、会費納入状況を確認のうへ、第9回大会年度(2013年10月1日～2014年9月30日)とそれ以前の年度の会費が未納の方へのみ、お送りしております。封筒の氏名の隣の丸括弧内の数字が未納の年数です。なお前回は、事務局の時間不足から全会員に振込用紙をお送りしました。そのため、未納ではないにもかかわらず、振り込んでいただいた方が幾人もみえました。その分は次年度の会費とさせていただきます。ご了解ください。今回は該当の会員にのみ用振込紙を同封していますので、それが入っていない会員は完納状態にあります。

3) 会報原稿の募集

会報を通じて研究情報の提供と研究者間の交流に努めています。会員研究情報、新会員の自己紹介(全員の方をお願いしています)、海外幼児教育だより、幼児教育史研究への提言などをお寄せください。文量は3000字程度で、メールまたは郵便で、なるべくデータを付けて事務局までお送りください。年2回の会報発行時までには届いた分を随時、掲載します。次回の会報は2015年2月頃に出る予定です。

4) 所属・住所などの変更届けに関するお願い

できるだけ学会のメールアドレスまでお知らせください。秋には新しい名簿を作成する予定です。

5) 謝辞

本号作成に際しても、前号と同じく、榊瑞希子理事と中村早苗会員にご尽力をいただきました。また、第17号のHP版で追記したように、阿部真美子理事は青山学院女子短大をこの3月末に退職されるまでの2年余り事務局を支えてくださいました。ともに心よりお礼を申し上げます。

幼児教育史学会会報 第18号 2014年6月4日

編集・発行 幼児教育史学会事務局 村知稔三

〒150-8366 東京都渋谷区渋谷4-4-25 青山学院女子短大子ども学科気付

Tel:03-3409-7337/Fax:03-3409-3985

E-mail:admin@youjikyokushi.org/HP: http://youjikyokushi.org

郵便振替口座 00190-9-73668 幼児教育史学会